井上和子先生のご退任にあたり

斎藤　武生

井上先生が本学に着任されたのは1988年のことである。神田外語大学の開学時期と重なっている。2年後の1990年に先生は学長に就任され、本学の管理運営の指揮をとられる一方、教授を兼任されることで、引き続き教育研究面でのリーダーシップをとられた。こうした激務のなか、いち早く先生は大学院の設置を構想され、学長就任2年後の1992年には言語科学研究科修士課程（英語学専攻・日本語学専攻）の設置を実現され、研究科長を兼任された。さらに、修士課程が完成年度を迎える2年後の1994年には、同研究科に博士課程（言語科学専攻）を設置された。博士前期課程の設置後2年で博士後期課程を設置するというのはごく当たり前のことのようにも見えるが、一般の大学が置かれていた当時の状況からするなら、神田外語大学はかなり異例の早さで博士課程の設置を実現させたことになるであろう。学長としての先生の強い熱意と指導力があってはじめて可能となる出来事であった。

その後、1997年に井上先生を研究リーダーとする中核的研究拠点（COE）形成プログラム「先端的言語理論の構築とその多角的な実証」がスタートする。これを機に先生は学長職を辞し、COE担当の大学院教授として教育研究の第一線に復帰されることになる。この研究計画がスタートする少し前、外部にいた私はCOE形成基礎研究費が神田外語大学に決まったという知らせをたまたま『文教ニュース』を見て知り、驚嘆したことを今でもよく記憶している。文部省が各研究分野の研究拠点機関づくりを国の政策として積極的に推し進めようとしていることは十分承知していたが、人文科学系、とりわけ言語学研究の分野に関してはどの国公立大学の組織も進んで名乗りを上げるだけの体制や準備が整っておらず、躊躇する状況にあっただけに、私立大学として歴史の浅い神田外語大学が国の拠点機関に選ばれたという知らせは私にかぎらず、多くの関係者にとってショッキングなニュースであったはずである。しかし、研究リーダーが井上先生とわかってみれば、それも容易に納得のいく出来事であった。

COE形成プログラムは予定された5年間の研究期間をこの3月に終えることになる。プログラムの関係者がその間に研究報告書をはじめ数多くの研究成果を世に送り出してきたことはよく知られている。20世紀の先端的言語研究の総決算ともいうべき役割を果たしてきたこのプログラムが21世紀にほんの少しだけ足を踏み入れたところで幕を閉じる、ということはいかにも象徴的である。というのは、このプログラムは単に20世紀の総決算を目指したものではなく、新しい時代の言語研究の在り方を示唆する役割も当初から期待されていたと考えられるからである。その示唆をどう受け止め、発展させるかが今後の重要な課題である。さらに言うなら、新世紀を迎え、言語の理論的研究および言語の応用的研究に新しい地平を切り拓く努力がこれからの研究活動に求められるということである。幸いなことに、井上先生を研究代表者として、こうした要請に応える新たな大型の研究プロジェクトがすでに計画され、動き始めている。順調にいけば今年度から実施されることになる。

井上先生の研究者および教育者としての側面については他の執筆者に譲ることにして、ここでは社会的活動面での先生のご功績に少しだけふれることにしたい。前述したように、先生が本学に着任されたのは1988年であったが、それ以前の国際基督教大学・津田塾大学で教鞭をとっておられたころから、先生は言語学者あるいは一人の大学人としてのお立場から国の文部行政にかかわる重要なお仕事をいくつもなさってこられた。たとえば、文部省学術審議会委員および専門委員、日本ユネスコ国内委員会委員、国際日本文化研究センター評議員、学位授与機構評議員などのほか、日本語教育にかかわる文部省の調査研究などにも加わり、専門的なお立場からその都度大きな貢献をなさってこられた。昨年からは日本学術会議会員としてのお仕事が新たに加わり、先生の果たされる社会的役割はますます増大している。

こうした先生の豊富な公職歴とは別に、言語学の研究者および研究リーダーとしての先生の幅広い学会活動は人の最もよく知るところである。思いつくものだけでも日本言語学会会長、日本英語学会副会長、言語学者常置国際委員会副会長、大学英語教育学会評議員などの役職を歴任されている。この学会活動を通して、国内外の言語学者、とりわけ若手研究者の育成に先生が大きく貢献されてこられたことが知られている。直接・間接に先生の学恩を受けた人の数は計り知れない

ものがある。

かくいう私も実はその一人で、比較的若いころ先生からご指導いただく機会に恵まれた。というのは、私の関係した初めての本が明治図書から出版されたとき、『英語教育』誌上で書評してくださったのが井上先生であったからである。当時の教育界で大きな関心事となっていた「変形文法の英語教育への応用」という問題にどう取り組むべきかをシンポジウムの形式で論じたもので、先生からいただいた好意的な評価とコメントは私にとって大変ありがたい、そして勇気づけられるものであった。関連して想起されるのは、これより数年前、『英語文学世界』という雑誌がチョムスキーの来日を記念して特集号を出したときのことである。その雑誌のなかで井上先生は「チョムスキーの横顔」と題するペーパーを書いておられるが、私が執筆した「変形文法とモデルの概念」という記事も一緒に掲載されたのである。この記事は東北大学の助手であった私のいわばデビュー作のようなものであっただけに、井上先生のような著名な学者と一緒に書かせていただいたということが嬉しく、我が身の幸運に感謝したものであった。その後も、たとえば、先生がまだ津田塾大学におられたころ、日本英語学会の大会が津田塾大学で開かれ、大会準備委員長の任にあった私が先生から直接ご指導をいただくという機会もあったが、身近に先生のお話しを聞けるようになったのは私が本学に赴任してからのことである。いかにも短い年月ではあったが、その間、先生からじかに多くのことを学ぶ機会を得たことがなによりも幸せであった。

私たちにとって井上先生の存在はあまりにも大きいために、先生が本学を離れると知って私たちが戸惑いや寂しさを覚えるのは避けがたい状況にある。しかし、これからも新しい研究プロジェクトを通して先生のご指導を受ける機会があるのだと考えるなら、心に安らぎを得ることもできる。

井上先生のご退任にあたり、先生の長年のご指導に深く感謝申し上げるとともに、先生のますますのご健勝を祈念いたします。